

熊本県における自閉症児療育の実態と課題

一 門 恵 子・緒 方 愛¹⁾・篠 崎 久 五²⁾

I 問題と目的

広汎性発達障害 (Pervasive Developmental Disorders) のカテゴリーに含まれる「自閉症」は、①対人関係の質的障害、②コミュニケーションの質的障害、③興味の限局や常同的・反復的行動を主症状とし、3歳以前に発症する障害である (DSM-IV, TR. 2002)。その障害の特異性から、これまで様々な療育方法が開発され実践されてきた。一門 (1997) は、わが国における自閉症児を対象とした支援の技法について概括し、TEACCH、認知発達治療、行動療法、受容的交流療法、感覚統合療法、動作法、コロロ法、生活療法、音楽療法等を列挙し、各治療技法の利点を組み合わせた支援が望まれると述べた。われわれは、篠崎を中心として1972年以来、学生ボランティアを主体とした自閉症幼児の療育活動を展開してきた (篠崎他、2000)。その活動は現在も本学学生たちによって継続されており、対象児の発達レベルやプログラムに対する反応の実態について報告した (一門他、2003)。自閉症幼児は、多動性、かんしゃく、言語指示の通りにくさ、偏食や睡眠の不安定さ、集団における孤立など、多彩な症状を呈し、就学に向けて親の不安も強い。複数の療育機関で集団適応・運動・言語などの訓練を受けているケースは少なくな。本研究は、われわれの療育活動の検討にも役立てるために、現在、熊本県内の相談・療育・保育機関等で行われている自閉症児に対する療育活動の実態把握を目的としたものである。

II 方法

1. 調査方法

表1に示すような内容を盛り込んだ独自の質問用紙を作成し、各機関に自ら出向き、インタビュー形式で各機関の療育担当者に直接質問し回答を求めた。一日の集団療育の流れを具体的に記入する欄も設け、実際に療育活動を行っている様子も参観した。表1に質問内容の一覧と、表2に訪問施設の一覧を表示した。

2. 調査期間： 2004年11月 ～ 2004年12月

1) 本学2004年度卒業生

2) 本学非常勤講師

表1. 質問内容一覧

Q1. スタッフの人数	Q8. 子どもと担当者の比率
Q2. 専門職種別人数	Q9. 個別支援の有無
Q3. 対象児の年齢範囲	Q10. 集団活動の担当者と個別支援の担当者は同一人物か
Q4. 定員と現在通園している人数	Q11. 個別支援の内容
Q5. 参加期間	Q12. 療育活動の目的
Q6. 活動プログラムの内容	Q13. 活動歴
Q7. 一日の流れ	

表2. 訪問機関一覧

1) 県相談所	7) 児童デイサービス事業
2) 市相談窓口	8) 民間研究所
3) 知的障害児通園施設①	9) 幼稚園
4) 知的障害児通園施設②	10) 保育園
5) 地域療育支援事業	
6) 県療育センター	

III 結果と考察

1. 各療育機関のスタッフの専門職種と人数

表3は療育活動に携わっているスタッフの専門職種ごとの人数である。どの機関も保育士が中心となって働いている。通園施設や公的療育施設に勤務している保育士の場合は、障害の特性を理解していることが多いが、一般の幼稚園、保育園や民間の療育施設などでは勤務してはじめて障害児に関わるというケースも稀ではない。表1を見ると、ST、PT、OT、心理関係など、本来なら療育機関には配置されてことが望ましい専門のスタッフが1名もしくは、全くいないとい

表3. スタッフの専門職種と人数

機関	職種	保育士	ST	PT	OT	心理	その他	計
県相談所		3	1	0	1	3	0	8名
市相談窓口		2	1	1	0	2	3	9名
通園施設①		5	1	0	0	0	5	11名
通園施設②		7	0	0	0	0	6	13名
地域療育事業		1	0	0	0	1	0	2名
県療育センター		6	0	0	0	0	0	6名
児童デイサービス		4	0	0	0	0	1	5名
民間研究所		0	0	0	0	0	5	5名
幼稚園		0	0	0	0	0	3	3名
保育園		5	0	0	0	0	0	5名

表 4 . 参加期間・定員・障害種別

療育機関	参加年数	定員	自閉症	ダウン症	その他	計
県相談所	1年	10～15	9	0	0	9名
市相談窓口	半年	10名以内	21	1	16	41名
通園施設①	1年～3年	24	23	0	1	24名
通園施設②	半年～3年	30	7	5	21	33名
地域療育事業	希望年数	なし	—	—	—	約250名
県療育センター	半年～4年	25	16	4	2	22名
児童デイサービス	半年～4年	20	4	3	9	16名
民間研究所	希望年数	なし	約50	—	—	約50名
幼稚園	3年	なし	6	1	1	8名
保育園	半年～3年	10	8	2	0	10名

う報告がされている。これについて一部の機関ではあるが、普段の療育活動には参加していないが個別支援などで、専門スタッフが定期的に参加している機関もある。充分、専門的な療育支援ができるための人材確保が目指される必要がある。

2. 各療育機関の参加期間・定員と対象児の障害種別

療育活動への参加年数を調べてみると、幼稚園や保育園、通園施設などに関しては入園してから長くても3年間は専門的な指導が受けられるが、公的な機関では半年～1年間というように報告されている。しかも、幼稚園や保育園に関しては前述のとおり、保育士や幼稚園教諭を中心に活動を行っているので、専門的な指導がなかなか受けられないケースが多い。また、支援が行き届いている通園施設も、県下で認可施設は2ヵ所のみであるため、県下全域から入園してくることもあり、定員という厳しい壁にぶつかってしまう。

このように、専門のスタッフが揃っている公的な療育機関での活動が、受け入れ期間が短いという実態である。この点は、1歳から3歳の間で公的機関での療育を受けられたとしても、一旦、地域の幼稚園・保育園へ入園してしまうと、専門的な指導を受けられる機会が少なくなってしまうということになる。

3. 各療育機関のプログラム内容

表5に各療育機関の主なプログラム内容を示した。ほぼ全ての機関で、自閉症療育では最も成果を遂げているショプラー (Schopler, E) によって提唱された TEACCH プログラムが導入されている。しかし、全面的に TEACCH の理念・技法に従って実践している所は公的機関の一部であり、半数以上は TEACCH の技法を部分的・形式的に導入している。TEACCH (Treatment and Education of Autistic and related Communication Handicapped Children) の技法は、「構造化」すなわち整然とした視覚的刺激を提示することによって自閉症児にとって理解しやすい状況設定をめざす方法である。①絵や写真カードを用いたスケジュールのシステム化、②絵や文字カードによるコミュニケーション手段のシステム化、③ジグ (掛け図) などを用いた作業

表5. 各療育機関の主要なプログラム内容

プログラム内容	TEACCH	リトミック	動作法	感覚統合	言語指導 個別支援	その他
県相談所	○	○	—	○	○	—
市相談窓口	○	—	—	○	○	SST
通園施設①	○	○	○	○	○	—
通園施設②	○	○	○	○	○	スヌーズレン
地域療育事業	○	—	—	—	○	遊戯療法
県療育センター	○	○	—	○	○	スヌーズレン
児童デイサービス	○	○	—	—	—	—
民間研究所	—	○	—	—	○	学習指導
幼稚園	○	○	—	—	—	—
保育園	○	○	○	—	○	—

工程や課題学習の手順のシステム化、④間仕切りなどによる活動場所のシステム化、などの技法が用いられる。このような構造化された状況設定によって、自閉症児は他者からの指示や提示された課題に応じることが容易になり、安定した行動の遂行が可能となる。各療育機関がTEACCHの技法を上手く活用することによって、個別支援を組み入れた望ましい療育活動が展開されることにつながると思われる。

次に多い療育活動はリトミックである。音楽療法士や専門のスタッフがいる機関ではリトミックと呼んでいるが、他の機関では「リズム運動」「ダイナミック・リズム」等の名称で音楽に合わせて体を動かすといったリトミック的要素を取り入れた活動が行われている。

感覚統合療法に関しては、大型遊具を使用し、専門家のアドバイスが必要なため、専用のプレイルームが常設されている機関や、作業療法士（OT）が常勤している療育専門機関で行われている。次に多かったのが、言語指導である。自閉症の最大の課題が、話し言葉の習得が困難、もしくは言語理解の障害を有するといった症状であり、どの機関も言語訓練に関しては、ST等の専門家に委託して支援が行われている。しかし、一般の幼稚園や保育園では、専門スタッフが不在のために言語訓練まで導入するという事は難しいといった状況である。その他、動作法などは指導出来る心理職の専門家が少ないという理由で行っている機関は3施設のみと少なかった。その他にも、スヌーズレンといった特殊な空間で、視覚的にリラックスを促し緊張を緩和させるという療育を行っている公立の機関もあったが、これは本来脳性まひ児を対象として取り入れられたものである。

4. 各療育機関の一日の活動の流れについて

各機関ほとんどの所が朝から療育を開始しているが、公的機関や児童デイサービス、地域療育事業などは平日の午前中のみで、その他は一日を通して活動が行われている。一日のはじめの活動は、どの機関も集団における出欠確認からで、その際、支援者が個々の子どもとコミュニケーションを図ったり、その日のスケジュールについて説明するといったことが行われている。このような集団活動の際や、一日の流れを把握させる時などは、どの機関においても必ず視覚的な補

表 6 - 1 . 療育機関の一日の活動の流れと個別支援の内容

施設名	プログラム	一日の流れ	個別支援内容
市相談窓口	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム体操 ・TEACCH ・S S T 	9 : 15 受付 ・シール貼り ワーク (個別支援)) プレイルームで遊ぶ) 9 : 40 リズム運動 ・ピアノの音にあわせて体を動かす) 9 : 50 トイレ 9 : 55 おやつ) 10 : 05 サーキット 10 : 20 お集まり ・名前呼び ・手遊び ・帰りの歌 10 : 30 終了	支援日：毎回の活動時に行われている ① 机上課題 例) マッチング 線引き 紐通し 型はめ パズル ② 概念指導 例) 色の識別 数概念 日常生活に必要な概念指導 ・個別の時間は1人に付き約10分程度。担当の指導員とマンツーマンで行われる。

助刺激が活用されていた。一日のスケジュールを提示する際に使われるカードは写真や絵・文字が入っており、いずれの機関においても手作りされていた。カードの提示の仕方は、各機関ごとに違いがあり、順に上から下にカードを提示する機関や、紙芝居のようにめくる形をとる機関などさまざまであった。10機関中、市相談窓口、通園施設、県療育センターの3つの代表的な療育機関の一日の活動の流れについて表6-1～表6-3に示した。

表6-1は、本市の唯一の公的な相談機関の療育プログラムであるが、発達診断などの相談業務を中心として行っており、小集団による療育活動は、表6-1の通り、時間的にも短く、個々の子どもの参加は、2週に1度の頻度である。個別支援の時間もスタッフやスペースの関係できわめて短い。

表6-2は、知的障害児通園施設であるが、自閉症幼児の療育を主眼として開設された機関であり、支援者としての大人の抑制系、すなわち大人の表情・音声・働きかけのタイミング等の影響力を強調したコロロ法(石井 聖、1987)を尊重した療育活動が展開されている。毎日の通園による自閉症の障害特性に合わせた徹底した療育・訓練がなされており、連日の裏山登山などユニークな活動が実践されている。個別支援も家庭での母親による支援と連携しており、充実した内容と言える。保護者の願いもあり、通園児の中には、保育園・幼稚園にも1週のうち何日か通園することで、一般児とのふれあいの機会をもっている者もいる。

表6-2. 療育機関の一日の活動の流れと個別支援の内容

施設名	プログラム	一日の流れ	個別支援内容
通園施設	<ul style="list-style-type: none"> ・リトミック ・TEACCH ・動作法 ・言語指導 ・行動トレーニング 	<p>9:00 登園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由遊び } <p>9:30 朝のお集まり①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リズム体操 ・個別指導 } <p>10:00 朝のお集まり②</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ ・返事 ・手遊び ・模倣 } 製作活動 ・はさみ、のり、クレヨンを使った机上での課題 } <p>11:00 戸外活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・山登り、公園利用、 買い物学習、散策など } <p>12:00 給食</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1階の食事の部屋でとる。 } <p>13:00 歯磨き</p> <p>そうじ</p> <p>帰りの準備</p> <p>個別面接</p> <p>14:00 降園</p>	<p>支援日：毎日</p> <p>一人あたり</p> <p>月に2～3回</p> <p>① 机上課題</p> <p>例) マッチング</p> <p>書字指導</p> <p>概念指導</p> <p>動作模倣</p> <p>言語指導</p> <p>口語模倣の練習</p> <p>発語の促し</p> <p>コミュニケーションスキルの向上</p> <p>持続・適応の練習</p> <p>・毎日、個別支援専用の部屋で担当スタッフが行う。時間は毎回1時間程度。個々の能力にあわせた課題を行っている。</p>

表6-3は、県立の総合療育センターの通園療育事業プログラムの活動内容である。TEACCHの理論と技法に従った療育が展開されている。教室内は子どもの背丈に合わせた高さのダンボール等で間仕切りされ、活動内容別に教室内のエリアが明確に分けられており、個別支援も個々の子どもの決められたコーナーで行われている。保育士が中心になって療育活動を実践しているが、療育センターの心理職のスタッフによる個別支援の協力体制がとられていることもあり、県内一円から利用されている。本来、肢体不自由児を対象とした療育機関であるため、スノーズレン等の特殊な療法も取り入れられている。

表6-3. 療育機関の一日の活動の流れと個別支援の内容

施設名	プログラム	一日の流れ	個別支援内容
県療育センター	<ul style="list-style-type: none"> ・TEACCH ・言語指導 ・感覚統合療法 ・リズム運動 ・スヌーズレン 	<p>9:30 登園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身辺整理 <p>↓</p> <p>10:30 朝のお集まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・朝のあいさつ ・名前呼び ・手遊び <p>↓</p> <p>11:30 自由課題①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その日決められたスケジュールを、自ら選択し教室の担当スタッフに絵カードで要求を出す。 ・教室の中は、子どもの背丈に合わせてダンボールで構造化されており、1コーナーごとに活動内容が異なる。 ・課題を1時間ごとに変えてスケジュールを進めていく。 ・自由課題のいずれかの時間に、感覚統合やリズム運動、スヌーズレンを行っている。 <p>↓</p> <p>12:30 給食</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教室内の一室で決められた位置に座って食べる。 ・食事指導は行っていない。 <p>13:30 自由課題②</p> <p>↓</p> <p>14:30 自由課題③</p> <p>↓</p> <p>15:00 降園</p>	<p>支援日：毎日</p> <p>3回ある自由課題のいずれかの時間に必ず入る。</p> <p>① 机上課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・マッチング ・触覚遊び ・ひも通し ・パズル <p>② 教室内部の構造</p> <p>※教室は構造化されており机上課題を行う以外にも各コーナーごとに以下のような活動が出来るようになっている。</p> <p>例) 絵本コーナー ビデオ視聴 トランポリン パソコン ピアノ CD</p> <p>・1時間ごとに区切られた活動のいずれかの時間にそれぞれ個別支援が入っている。担当は教室の担任。</p>

主活動については、機関ごとにやり方が別れてくる。公的機関や通園施設といった所では、主に苦手な課題への取り組みが多く、例えば、触覚や視覚的な刺激を取り入れた遊びや、リトミック、感覚統合、動作法などが主活動の時間に行われている。しかし、幼稚園や保育園では園の行事やスケジュールが重視されるため、こういった専門的な取組は不定期にしか行われていない。また、食事に関しては食べ方や箸の使い方、姿勢などのマナーが重点的に指導されている。偏食のつよい子どもに対しては、指導者と保護者が相談しあって改善を進めるといった方法をとっている機関もある。その他、体力の向上のために山登りなどの戸外活動を行う機関や、調理などの将来的に必要なスキルの学習を取り入れている機関など、独自の内容を主活動に取り入れる機関もある。

5. 各療育機関における個別支援について

個別支援に関しては、どの機関も個々の子どもの発達レベルに合わせた指導がされており、大半は手指の微細運動やマッチング、書字練習、数概念形成、社会性スキルの練習等の内容であった。特に、形や色のマッチングに関しては多くの機関が取り入れており、教材は、子どもの親しみやすいキャラクターなど、いずれも子どもの興味を引きやすいようにスタッフによる工夫が見られた。ソーシャル・スキルの勉強では日常生活で繰り返される会話の方法、意味などを視覚的に捉えやすい教材で教えられている。

また、言語指導が行われている機関は、ほぼ個別支援の時間帯で行われており、言語聴覚士(ST)などの専門のスタッフが担当している。主な内容は言語理解や概念形成、口形模倣・音声模倣訓練などであった。このような専門的な言語指導に関しては、実施されている機関とされていない機関があったが、個別支援についてはほとんどの機関で行われている。しかし、課題の内容や時間帯などは各機関ごとにばらつきが見られた。支援の形態は、指導者と対象児が向き合っただけに座る、もしくはマンツーマンの指導をしなくても課題に取り組める子どもに関しては、指定の場所に自ら着席し、決められた課題を行うといったやり方が取られていた。実際に課題を行う様子は、まず課題の入った箱もしくは籠が用意され、もう1つ横に学習の終了を意味する箱が用意されている。この2つの容器で学習の始まりと終わりの区別を判りやすくするというTEACCHの技法が活用されている機関が多かった。

次に、個別支援の時間帯については、療育専門機関のほとんどは、最低でも1時間の個別支援の時間がとられるが、保育園の特別クラスや一部の公的機関の個別支援はその日の活動の合間に行われているため、1人につき10分～15分程度で、1～2の課題しか出来ないという状況であった。また今回の調査では、幼稚園やデイサービス事業などの機関では抽出による個別支援は行われていなかった。個別支援の場所は、専用の部屋がある機関や、教室をつい立てなどで仕切り構造化されたコーナーで行っている所など、各機関それぞれに対応されていた。しかし、いずれの機関も個別支援時は、注意散漫にならないように外部刺激の遮断された空間すなわち隔離された状態で行うということが共通点であった。

今回、県下10ヵ所の自閉症児の療育機関を訪問し、どの機関も共通して、TEACCHの構造化の技法による視覚的補助刺激の活用や、リトミックなどのリズム運動を取り入れていることが分かった。また、言語指導に関しては、どの機関も個別支援の中で最も重要視されている。このような共通の実態が明らかになったが、今後の課題としては、個別支援の可能な機関の受け皿が小さいことや、個別支援を受けられる期間が短すぎるなど、さらに専門的な療育や支援を十分に受けられる機関が少ない等の課題が挙げられよう。

文 献

American Psychiatric Association (1994): Diagnostic Criteria from DSM-IV-TR

高橋三郎・大野 裕・染谷俊幸(訳) DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き、医学書院
pp.55-59.

一門恵子・丸山昌一・園田雄次郎(1997): わが国における自閉症児に対する介入の技法と早期療育の実態、九州女

学院短期大学・九州ルーテル学院大学研究紀要 VISIO No.24、pp.147-156.

一門恵子・河田将一 (2002)：自閉症児の支援活動としての「学童学級」の試み、九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター年報 第1号、pp.3-8.

一門恵子・篠崎久五・古賀史佳・仲里綾乃・西尾明子・加納寛子 (2003)：自閉症幼児を対象とした学生ボランティアによる療育活動の実態～熊本県自閉症研究会「親子学級」の現状について、九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター年報 第2号、pp.13-20.

石井 聖 (1987)「自閉」を活かす、学苑社

篠崎久五・一門恵子・服部陵子・鳥岡信孝・河田将一・天津透彦 (2000)：熊本の自閉症児療育学生ボランティア活動の歩み、別府大学紀要、第42号、pp.171-182.

謝 辞

快く調査に協力して下さった各療育機関の関係指導者の方々に心より御礼申し上げます。